

蘇る葵の上：『在明の別』が描いたもう一つの「葵の上物語」

宮崎，裕子
自由ヶ丘高等学校常勤講師

<https://doi.org/10.15017/13180>

出版情報：語文研究. 104, pp.34-43, 2007-12-21. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



甦る葵の上

—『在明の別』が描いたもう一つの「葵の上物語」—

宮 崎 裕 子

時点では、所生の皇子の即位に伴い女院号を得ていた。

卷二から開始する『在明の別』第二部の中心人物となる左大臣は、表向きは亡父の妹ということになっている女院に憧れて、女院の従姉妹にあたる宣耀殿女御——左大臣の実父関白の娘——に、相手が実は自分の異母姉であるとは知らずに叶わぬ恋心を抱き、独身のまま過こしていた。成人して左大臣の位についても依然として正妻を迎えようとしない甥を案じた女院は、彼に右大臣の大君との縁談を勧め、右大臣の強い要望もあつて、左大臣と大君との結婚が執り行われた。

十二世紀中頃から十三世紀初頭にかけて成立したとされる『在明の別』の主人公である女院は、太政大臣の一人子で、主な活躍の舞台である巻一においては、男子のいない自家の後継者を獲得するために男性として生活し、右大将の地位にあった。右大将の妻となった対の上は、密通によって、太政大臣の弟である関白との間に男児を、そして、関白の息子である内大臣との間に女兒を出産する。太政大臣の血縁に連なる二児（後の「左大臣・中宮」）は右大将の子と公表され、家の後継者を得た主人公は、右大将の死去を装って男装を解き、故右大将の妹姫として女御入内。巻二が語り始められた

こうして左大臣の正妻となつた大君は、『源氏物語』の葵の上を承けて造型された人物で、両者には、大臣家の傅き娘で容姿端麗、夫に対して端正な態度を崩さず、よそよそしく振る舞う、気安く会話も交わせない程に取り澄ましている、

などの共通点があり、物の怪となった六条御息所に取り憑かれた葵の上と同じく、大君も左大臣の愛人である中務卿宮の北の方の生き霊に取り憑かれている。

ところが、葵の上が六条御息所の物の怪によって絶命させられたのに対して、『在明の別』は大君の死去という展開を採らず、中務卿宮の北の方の生き霊に取り憑かれて一時は絶え入ったかに見えた大君は、山の座主の誦経によって蘇生を遂げた。回復後の大君は、左大臣への態度を軟化させ、夫婦仲は改善する。

葵の上像を強く意識して大君という作中人物を造型しながらも、彼女を生き延びさせ、夫に親しみを持つようにさせたのはなぜなのか。そこには、『葵の上の物語』のもう一つの帰結を描こうとした『在明の別』の何らかの意図が隠されているのではないだろうか。

二

大君に関する記述に『源氏物語』からの影響があることについては、すでに辻本裕成氏による詳細な指摘がなされているため（『王朝末期物語における源氏物語の影響箇所一覧』）『国文学研究資料館文献資料部調査研究報告』第一七号、一

九九六年二、本稿では、『源氏物語』と『在明の別』の本文を比較対照することは省く。

『在明の別』における大君の描写は、『源氏物語』の詞章をあからさまに模倣しているわけではないが、「氣高し」「うるはし」などの葵の上と共通の形容詞が大君に対しても使われ、大君の全体的な雰囲気も葵の上のイメージを踏襲している。そして、懐妊した大君は、葵の上が六条御息所の生き霊によって苦しめられたのと同じく、左大臣と密通している中務卿宮の北の方の生き霊に憑かれて絶え入るのだが、その後、大君の物語は葵の上のそれとは正反対に展開していく。

小康状態を保っていた葵の上は、

殿のうち人少なにしめやかなるほどに、にはかに例の
御胸をせきあげていたうまどひ給。内に御消息聞こ
え給ほどもなく絶え入り給ぬ。…

のゝしりさはぐほど、夜中ばかりなれば、山の座主、
何くれの僧都たちもえ請じあへ給はず。

(葵巻 311頁)^(注)

と、突然に絶え入ったのであるが、同様の状態に大君も陥った。

すこしひまを見すとて、うちやすみたるあか月がた、にはかにせきあげて、あえなくたえいり給ぬ。

(巻二 413頁)^(注)

ところが、物の怪によつて絶え入つた葵の上がそのまま息を吹き返さなかつたのに対して、大君は蘇生する。

『源氏物語』で葵の上が絶息したのは「夜中」の出来事であつた。それゆゑ、蘇生のための読経を行う僧たちを集めることができず、葵の上はそのまま死去してしまふ。一方、『在明の別』の場合、大君が絶え入つた時間帯は、「夜中」ではなく「暁方」。この些細な、だがしかし、決定的な差異が、葵の上には与えられなかつた生存の機会を大君にもたらし、右大臣家には彼女を蘇生させるために大勢の僧が参集する。

曰ころさぶらふかぎりはさらにもいはず、所くをたづねて、大との(=太政大臣)よりしるしあるといふかぎりたてまつらせ給。女院より御つかひしきりにまいり、いみじくののしりみちたり。女院のおほせ事ありければ、やまのぞすあはてまいり給えり。…(山ノ座主方經ヲ)よみ給える御こゑはるかにすみのぼる心ちするに、(大君ノ)かはりゆく御けしき、いさゝかなをりて、めをわ

づかにみあげ給へり。(巻二 413頁)

女院の要請を受けた山の座主の読経により大君は息を吹き返し、それ以降、徐々にはあるが、左大臣へ笑顔を見せたり、会話を交わしたりするようになり、夫に打ち解けていく。

(大君八) うつし心もおはせざりしにや、わが御心ももき御やまゐに、ものゝ心ほそくおほしなられるまゝ、さすがに(左大臣ヲ)うちたのむ御心もそふわざにや、この御なやみのゝちしも、いとしばしのへだても、あはれに心ぐるしくのみ思なられ給へるに、(左大臣八)かくてみたてまつり給えるゆめの心ちのみして、いまさらに御なみだもせきやらぬ。(巻二 417頁)

(大君八) いみじかりし御なやみのほどに、をのづから(左大臣ノ)あさからざりし御心さしのほどもおぼしとり、すこしをとなび給しるしにや、こよなき御けはひもをのづからうちゆるび、すこしうちほゝゑみ給ときままじれば、まして御くちつきあいぎやうも、いとおほくまさるべし。さるは人よりもをくふかくみまほしき所ぞをはしける。いまもおぼるげにても、もていで給はず、

事つゞけての給ことなきぞわびしかりける。

(卷三 423) 424頁)

はかくもものし給ぞ」…

(葵巻 310) 311頁)

回復後、自分を慕つようになつた大君の姿に、左大臣が感涙する「一は、出産後の葵の上と光源氏との対面の場面が下敷きとなっているようだ。

御いらへ時々聞こえ給も、猶いとよはげ也。されど、むげに亡き人と思ひきこえし御ありさまをおぼし出づれば、夢の心ちして、ゆゝしかりしほどの事どもなど聞こえ給ついでにも…

(葵巻 310頁)

また、大君が端正に過ぎた態度を次第に和らげていく「一の草子地「すこしをとまび給しるしにや」は、葵の上が光源氏に「子供じみている」と言われた次の箇所を受けた言い回しであろうか。

かやうにておぼつかかなからず見たてまつらばうれしかるべきを、宮のつとおはするに、心ちなくやとつゝみて過ぐしつるも苦しきを、猶やうゝ心づよくおぼしなして、例の御座所にこそ。あまり若くもてなし給へば、かたへ

おそらく、こうした大君の変化は、出産後に光源氏への態度を和らげ、宮中に出仕する彼を「常よりは目とどめて見だして」(葵巻 311頁)見送つた葵の上が、そのまま生き続けていたとしたら辿つたはずの変化の過程なのだろう。

物語の享受者は、しばしば「もしも、登場人物の誰々が、あの時死ななかつたら…」との想像を逞しくし、時に作家は、そのような発想から新たな物語を紡ぎ出す。

蘇生のための読経をする山の座主や僧都たちがいなかったから葵の上は死んだ。では、もしもあの時、彼らが葵の上の側に駆けつけることができたとしたら…。一旦はその到来を予感させられながら、葵の上の死によって実現不可能となつた、光源氏と葵の上の「その後」を描く誘惑に駆られた誰か——『在明の別』の作者——が、あたかも、死んでしまつた登場人物をリセットボタンで甦らせてそこからロールプレイングゲームをやり直すかのように、「生き延びた葵の上の物語」を創り出そうと試みたとしても不思議はない。

生き靈騒ぎが落着いた後、大君については前掲の二箇所の他に、中務卿宮の北の方、内大臣、左大臣の母である対の上が立て続けに死去した後に、女兒を出産したこと、そして、

やうくすみなれ給まゝに、(大君方)をのづから御
 みがほ、ことつゞけの給ときあるは、いとみまほしくあ
 いぎやうづきたれば、(左大臣八)いかゞはせんにおほ
 しなるべし。
 (巻三 437頁)

と、笑顔を見せ、言葉数も多くなつた彼女が、出家を志す左大臣の絆しの一つとなつてゐること、この二つの事項が簡単に記されるのみで、どうやら、『在明の別』作者の関心は、「生き延びた葵の上の幸福なその後」を描くことにあつたのではないようだ。

それどころか、左大臣は、大君が夫に対する態度を和らげ、思慕の情を向けるようになってもお、女院への憧憬を抱き続け、東宮に入内した宣耀殿女御を諦めることができず、憂悶のうちに世を儚み続ける。

そもそも、大君に対する左大臣の「あさからざりし御心ざ

しのほど」は、真実に深いものであつたのか。生き靈事件の際には、こうした疑念を抱かざるを得ない件りがある。

(大君八)なを心ある人もみえず。御かたちもかはり
 たるやうにて、その人もみえ給はず。いとほひやかに
 けちかき物から、ねたげなるまみのけしき、左のをとゞ
 はさやうにもわき給はず、ちゝとの(右大臣)ぞ、
 「いとあやしう思ひかけぬ人にもに給えるかな」と心え
 ずおぼさるゝに、うちみじろぎて、

さまぐにあさゆふこがすむねのうちをいづれのか
 たにしばしはるけん

との給けはひ、いさゝかその人にもあらず、たがうべく
 もあらぬを、ちゝをとゞのみぞ返々あやしとかたぶかれ
 給。
 (巻一 413-414頁)

大君の顔付きが彼女に憑いている中務卿宮の北の方のそれに様変わりし、北の方の生き靈は大君の口を借りて左大臣への恨みを詠じる。そして、この時の詠歌が大君が口にする唯一の和歌である、というこの場面描写は言うまでもなく、葵の上の声や雰囲気が六条御息所のそれに変わり、葵の上の口を借りて御息所が光源氏に語りかける、『源氏物語』葵巻の次

の箇所を典拠としたものである。

「いで、あらずや。身の上のいと苦しきを、しばしやすめ給へと聞こえむとてなむ。かくまいり来むともさらに思はぬを、物思ふ人のたましひはげにあくがるゝ物になむありける」となつかしげに言ひて、

なげきわび空に乱るゝわが魂をむすびとどめよした
がへのつま

との給声、けはひ、その人にもあらず変はりたまへり。
いとあやしとおぼしめぐらすに、たゞかの御息所也けり。

(葵巻 306〜307頁)

葵の上の声や雰囲気が六条御息所のそれに變じたように、大君の顔付きや雰囲気も中務卿宮の北の方のそれに完全に様変わりするのだが、この時、その現象に気付くのは、大君の父親であり、中務卿宮の北の方の兄でもある右大臣ただ一人。左大臣は、右大臣と同じく、大君とも中務卿宮の北の方ともごく近い関係にありながら、この時点では、大君の変化を察知することができない。その後、憑坐童に移された北の方の生き霊が左大臣への恨み言を纏々述べたことよって、ようやく左大臣は目の前で起きている事態を理解するに至つ

た。

大君の父である右大臣は、彼女の变化をただちに判別できたとこののに、夫たる左大臣には、それが不可能だった。つまりるところ、大君に対する左大臣の「あさからざりし御心ざしのほど」とは、文字通り「浅くはない」という程度でしかなく、さほど深いものでもない。その事実を明示して、『在明の別』は、「生き延びた葵の上のその後」を語り始める。

四

大君を蘇生させた『在明の別』は、「生き延びた葵の上のその後」として、いかなる物語を紡ぎ出していったのか。

数多の女性たちのもとを渡り歩いてきた左大臣は、大君と結婚する以前から、粟津に住む四条の上のもとへ人目を忍んで通っていた。この四条の上は内大臣の娘なのだが、彼女の母である三条の女が、不実な内大臣に失望して子供の誕生も告げずに粟津に隠れ住んだため、父に存在を知られていなかった。

左大臣と大君との結婚は四条の上を嘆かせたが、大君の

あくまでただかくうつくしき物から、のこりおほくうち

とけにくきさまぞし給へる。人さまのあまりうるはしく、
ちりもあぬ心ちして、なつかしくうちかたらひて、思ふ
ことをもはるけつべきかたぞ、こよなくをくれ給える。

(巻一 399 頁)

という、美しくはあるものよそよそしく端正過ぎる雰囲氣
に接した左大臣は、ついに理想の女性と結ばれ得なかつた自
分の宿世に心弱りし、四条の上を京へ迎えようと決心する。
大君の端然とした近寄り難さゆえに、左大臣の四条の上に対
する愛情は募り、彼は京に迎えた四条の上の側を「心やすく」
(巻一 407 頁) 思う。

京に移り住んだ四条の上は、その直後、娘の存在を知らず
にいた父内大臣に見出され、親子の名乗りを遂げる。娘のも
とに左大臣が通つてゐることを知つた内大臣は、彼を婿とし
て饗心し、四条の上と左大臣との仲は世間的に認知された。
大君の父である右大臣はそれを知つても、貴顕の男性は複数
の通い所を持つてこそ栄えがあり、婿の密かな通い所が実は
内大臣の息女であつたことは喜ばしいことだ、という態度を
示したため、左大臣をめぐつて右大臣家と内大臣家が反目
し合つこともない。以後、左大臣は、

右のおとゞ、うちのおとゞ、たゞをなじほどにかよひあ
りき給とのゝの中にて、いづかたもいとこのまし。

(巻一 411 頁)

と、大君と四条の上のもとへ同じ頻度で通い、左大臣が兩大
臣家から婿として厚遇されるようになったことは、甥の身を
案じていた女院を喜ばせた。

大君と四条の上は同時期に懐妊し、二人共に左大臣と愛人
関係にある中務卿宮の北の方の生き霊に取り憑かれるもの、
事なきを得て、大君は女兒を、四条の上は男児を、それぞれ
無事に出産。生き霊騒ぎを機に、それまで左大臣に疎々しかつ
た大君も徐々に夫に親しむようになり、二人の女性と一男一
女に囲まれて安定した幸福な幸せな日々を送つてゐるかのよ
うに見える左大臣だが、

かゝれど物思ひのはるるよなければ、つきもせずあくが
れたる心のはてぞいとつしるめたかめる。

(巻二 437 頁)

と、依然として女院を慕い続け、宣耀殿女御のことも諦めら
れないことが語られる。

『在明の別』が多大な影響を受けた『今とりかへばや』は、吉野の大君と右大臣の四の君とを、

限りもなしと思ひきこゆる吉野山の君も、たゞよしある、心にくゝおくゆかしく、あてになまめかしく、けだかくなどある方こそ似る物なけれ、ひとすぢに子めきらうたげに心苦しきさまは、これ(=四の君)になずらふべき人ありがたくや…
(巻四 303頁)^{注4)}

と評する男君が、それぞれに性格の異なる女性たちと幸福生活を送る姿を描いている。

しかし、『在明の別』に描かれているのは、「けだかくうつくしき」大君と、

気色たゞらうたくこめきて、さらに心へだつべきさまならず、いとあはれにうちなびきたる…(巻二 407頁)

四条の上を得てもなお、「思ひそめしさまならぬすくせをおぼしむするゝよなく、むすぼゝれすべし」(巻三 436頁)と憂愁に沈む左大臣の姿である。

左大臣は、大君・四条の上とそれぞれの子供たちに囲まれ

ながらも、心の奥底では他の女性を希求し続け、遂に理想とする女性と結ばれることのなかつた自身の宿世を嘆き、心満たされない日々を送る。端から見れば申し分のない幸せを享受しているかに見える左大臣ではあるが、当人は決してそれに満足することができず、ついには、長年に亘つて思いを懸けてきた相手である宣耀殿女御のもとに侵入するものの、女御に拒絶されて引き下がらざるを得なかつた。その翌日、大君のもとへも四条の上のもとへも赴かず、たつた一人で物思いに沈む左大臣の姿は、叶わぬ恋を追い続け、一見幸福そうに見える現状に満足し得ない彼の心を浮き彫りにしている。

大君との結婚当初、左大臣は彼女について、

女君のつくるひたてられ給たる御さまかたち、いとぞめでたき。かんざし、うしろつき、御ひたひがみのかゝりたるつらつきなど、いささかくちをしき所まじり給はず。たゞいかにぞや、物なつかしくにはほはしきかたをそえばやとぞ、つきせすまぼられ給。

(巻二 406～407頁)

と、容貌には全く非の打ち所はないが、親しみやすさの不足が唯一の欠点だと物足りなく感じていた。だが、その大君が

夫に打ち解けてきて、ついに彼の心が満たされることはなかった。

五

それでは、「葵の上の死」をリセットして、『在明の別』は何を物語ろうとしたのであろうか。

大君に失望して、理想の女性と慕う女院のような人とめぐり逢うことのできない自身の宿世を口惜しく思い、「ついに思事かなふまじきみのちぎりぞ、猶たちるにうちなげかる」（巻一400頁）左大臣の姿は、

心のうちにはたゞ藤壺の御ありさまをたくひなしと思ひ
きこえて、さやうならん人をこそ見め、似る人なくもを
はしけるかな、大殿の君（＝葵の上）いとをかしげにか
しづかれたる人とは見ゆれど、心にもつかずおぼえ給て、
おさなきほどの心ひとつにかゝりて、いと苦しきまでぞ
をはしける。（桐壺巻 26～27頁）

と、藤壺を理想の女性と考え、葵の上を気に入らない光源氏に似ている。

その光源氏は、葵の上の死後、藤壺の姪であり彼女によく似た紫の上と共にありながらも、藤壺への思慕を捨て去ることなく、紫の上と同じく藤壺の姪にあたる女三の宮を正妻に迎える。仮に葵の上があのまま生き延びて夫に親しむようになったとしたら、彼女と光源氏とはどのような日々を送ることになったのか。

この問いは、『在明の別』の作者の想像力を掻き立てたに違いない。そして、『源氏物語』の享受者たちが想像力を喚起させられて『山路の露』『雲隠六帖』を生み出していったように、『在明の別』も甦る葵の上「大君」を創り出し、『源氏物語』では葵の上の死によって永遠に失われた、「葵の上と光源氏のその後」を物語ろうと試みたのだから。

『在明の別』の大君は、生き霊によって絶え入るも蘇生して、左大臣への態度を改める。しかし、大君が左大臣へ親しみを示すようになって、二人の夫婦仲に「めでたしめでたし」の結末は到来しない。女院を憧憬する左大臣は、宣耀殿女御に言い寄って拒絶され、理想の女性と結ばれることのない自分の宿世を嘆く。結局のところ、大君が端正な態度を和らげて、二人は琴瑟相和す夫婦にはなれなかった。

つまり、参内する光源氏の姿を何時になく目をとどめて見送った葵の上が、その後も生き続けたのなら、彼女は夫へ

の態度を和らげていき、光源氏と葵の上との夫婦仲は改善したはず。しかし、葵の上と打ち解けても、藤壺を思慕する光源氏の心が静まることはなく、彼は叶わぬ恋を追い求め続ける。それが、『在明の別』の作者が左大臣と大君とに仮託して物語る「光源氏と蘇生した葵の上とのその後」なのだろう。

『在明の別』は、大君を造型するにあたって、安易に「源氏物語」を模倣したのではない。単なる模倣に過ぎないのであれば、大君も中務卿宮の北の方の生き霊に取り殺されたはずである。大君に葵の上像を投影することによって、左大臣と大君との関係に光源氏・葵の上を重ね合わせ、蘇生した大君と左大臣との関わりを、「葵の上と光源氏のその後」として演出しているのだ。

注

注1 男主人公（または、それに準ずる男性）の意に染まない正妻が登場する中世王朝物語は、『在明の別』以外にも、『あきざり』、『しのびね』、『あさちが露』、『小夜衣』、『苔の衣』、『兵部卿物語』が現存している（継母・実母の計略により男主人公が女主人公の妹と結婚させられた『住吉物語』、『木幡の時雨』は除外。また、本文に脱落部分が多く、男主人公と正妻との関係が詳細ではない『恋路ゆかしき大将』も除外した）。しかし、男主人公と不仲な、あるいは男主人公にとって物足りない正妻が葵の上像を下敷きにして造型されている作品は、『在明の

別』の他には、鎌倉後期（南北朝期の成立とされる『小夜衣』の男主人公である兵部卿宮の正妻大殿の姫君に関する記述にその影響を見出すことができるだけである。しかも、『小夜衣』の場合、あくまでも、葵の上と、『狭衣物語』の一品の宮に関する表現とを継ぎ接ぎして、「男主人公の不仲な正妻」像を形成したに過ぎない。

言うまでもなく、中世王朝物語群は、『源氏物語』から絶大な影響を受け、数多の登場人物が『源氏物語』の主要人物をモデルに造型されている。『無名草子』が桐壺更衣・藤壺・紫の上・明石とともに「めでたき女」と讃えた葵の上だが、にもかかわらず、少なくとも現存している中世王朝物語において、純粹にその人物像を踏襲して造型された作中人物だと言えるのは、『在明の別』の大君のみなのである。

それとも、散逸してしまった大多数の中世王朝物語の中には、葵の上像を継承した女性を登場させた作品も多く含まれていたのだろうか。葵の上像を中世王朝物語はどのように受け継いでいったのか、それを明らかにするために、まずは、散逸物語の中に埋もれている手掛かりを掘り起こす作業が必要である。

注2

注3

注4

『源氏物語』の引用は、『新日本古典文学大系』による。
『在明の別』の引用は、『鎌倉時代物語集』による。
『今とりかへばや』（『とりかへばや物語』）の引用は、『新日本古典文学大系』による。

（みやざき ゆうこ・自由ヶ丘高等学校常勤講師）